

早稲田大学 2015 年度 帰国生・外国学生入試 共通試験
入試問題の訂正内容

＜帰国生・外国学生入試 共通試験＞

【国語】

問題冊子 6 ページ 二：本文 4 行目 傍線部①

および

問題冊子 8 ページ 二 問 8：問題文 傍線部①

(誤)

「…私たちは日常の中で①シュウシ音や声を～」

(正)

「…私たちは日常の中で①シジュウ音や声を～」

以上

2015年度
国語
(問題)

<H27092081>

注意事項

- 一 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 二 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 四 受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左の記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- 五 受験番号の記入にあたっては、左の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は、採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

(記入例)

57001番



万	千	百	十	一
5	7	0	0	1

(数字見本)

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 六 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 七 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。
- 八 いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。
- 九 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

イノベーションの本質は技術革新ではなく、革新的な商品やサービスによって、社会に役立つ新しい価値を創出すること、つまり価値づくりにある。技術革新がその中で果たす役割は大きい、それ自体が目的ではない。イノベーション創出に苦勞している日本企業の最大の問題は、技術革新が「真の顧客価値」に結びついていない点にある。

この20年ほどで、顧客価値に結びつくイノベーションの特性は変わった。例えば日本企業が主導した3Dテレビや携帯電話の様々な新機能も大きな経済価値には結びつかなかった。一方で、テレビもお財布機能もない米アップルの「iPhone（アイフォン）」は圧倒的な使いやすさや美しいデザインで大きな価値を生んだ。無料通信アプリ「LINE」も新しい機能というより楽しく気持ちよい使い勝手に大成功した。技術力の高い大企業の方が新機能の開発は得意でも、それだけではイノベーションは成功しにくくなった。技術革新によって顧客にとっての本当の価値をつくらなくてはならない。

商品の価値は、機能的価値と意味的価値を合計したものである。その中で近年、意味的価値の重要性が高まってきた。機能的価値とは、イな評価基準が定まった商品の機能・仕様に関する顧客価値である。携帯電話であれば「厚さ何ミリ」「テレビ機能がついた」など価値としてはわかりやすい。日本企業が常に強調する点である。

意味的価値とは、顧客が主観的に意味付ける価値である。消費財であれば、使いやすさや、持つ喜びなど、商品の機能や仕様だけでは決まらず、主に顧客の中でつくられる価値だ。生産財でも、顧客企業が使用する中で決まる価値である。同じ革新的な機能を持った化学材料や電子部品でも、顧客企業がそれを使ってつくりだせる経済価値によって顧客価値は全く異なる。

もちろん医薬品のように機能的価値のみが格段に重要な産業もある。しかし多くの産業で、次の2点からイノベーションにおける意味的価値の重要性が高まってきた。第一に、技術と社会の成熟化に伴い、求められる商品価値が高度化・複雑化した。そうならば単純に数字で表される機能的価値だけでなく、機能を越えた意味的価値が求められる。第二に、機能的価値のみでは、過当競争が起こりやすく、成功するためにはAが不可欠になってきた。

長年、機能や品質など機能的価値を得意にしてきた日本企業は、意味的価値への対応が遅れている。意味的価値には、顧客に入り込んで共創する顧客起点の経営が求められる。しかし、多くの企業では顧客重視と言いつつ、顧客起点ではなく市場起点になっている。

市場起点では、市場を分析して、規模が大きく成長する分野を狙う。その中で、シェアの最大化を目指す、売り上げ重視の戦略である。これには2つの問題がある。第一に、市場分析を優先するので真の顧客価値が創出しにくい。第二に、大きな成長市場を狙うので、強力な企業が同時に参入し、過当競争が起きやすい。そのため市場参入後、利益を高めるのは困難である。社会貢献としても成長市場の後追いではなく、独自の市場を開拓する方が重要だ。

一方、顧客起点では、まずは特定の顧客群に入り込み、革新技術によって自社独自の大きな顧客価値が提案できるかどうかを検討する。例えば生産財では、顧客企業の業務プロセスを分析し、顧客企業の利益が高まる商品・ソリューションを提案する。

顧客が気づいていない、顧客のもうけが大きくなる提案なら、高価格でも喜んで購入してもらえる。売り上げは限定的でも利益率は高い。同時に他市場に広く横展開し売り上げ・利益拡大にも取り組む。実は顧客企業の深層に潜む本質的な問題解決に結びつく顧客価値は、カスタム化のような表面的な個別の要望よりも普遍的で横展開がしやすい。

消費財でも同様に、顧客起点のイノベーションでは、独自性の高い意味的価値を含んだ真の価値を徹底的に追求する。逆に市場の規模や成長性を優先して参入しても価値づくりは難しい。

問題の大きい市場起点に企業がこだわる理由は2点ある。第一に、1990年ごろまでは大きく成長する市場を狙う戦略が正しかった。競合企業が同時に参入しても複数が一緒に成功できた。しかし、^②現在は、液晶テレビや太陽電池パネルのように市場が拡大しても企業が利益を出せない事例が増えている。第二に、顧客起点を実施する能力が足りない企業が多い。顧客起点を成功させるには意味的価値まで提案する能力が必要だが難しい。

最後に、消費財と生産財の順に、意味的価値を創出する問題点と解決の方向性を説明しよう。まず消費財では意味的価値の評価の難しさが大きな障害となる。機能的価値と違い客観的な評価基準がない。例えばiPhoneの使いやすさやデザインの魅力を企画段階で評価するのは難しい。数字や言葉で表しにくい意味的価値は、日本的なコンセンサス重視の意思決定では扱いにくい。そのためテレビの3D化や何%軽量化のようなわかりやすい差別化を強調しがちになる。今でも企業の企画書は競合企業との技術仕様の比較が中心だ。

解決策としては、企業が意味的価値の重要性和評価の難しさを認識することである。次に、そのような顧客価値を構想できる人材を育て選抜する。評価や伝達が難しい価値なので、^③正しい人材が選択できれば、顧客価値の内容については権限を与えるべきだろう。自動車産業は歴史的に意味的価値への認識が高く、このような経営を比較的うまく実施している。

意味的価値は顧客との接点で生まれる。消費財に関して、筆者はこれを広義の「デザイン価値」と再定義している。顧客が商品を「見る」(^④意匠)、「使う」(ユーザーインターフェース)、「所有する」(商品全体のコンセプト)——の3つの接点から統合的につくられる顧客価値である。アップルのような価値づくりにはデザイン価値を総合的に構想し先導できる人材が求められる。例えば英家電大手のダイソンでは、デザインとエンジニアの両方のスキルを持つ「デザインエンジニア」を活用しデザイン価値を高めている。

B の場合には、顧客企業が利益を高められる提案が必要だが、そのための知識・能力が欠けている企業が多い。顧客に深く入り込み、自社製品に関連する領域では顧客以上に顧客の事業・業務を熟知する必要がある。さらに、顧客価値を広く横展開するため、深く入り込みながらも、より広い範囲で多くの顧客企業の現場に精通すべきだ。このような知識が無くては、優れた商品企画はできない。

これを最もうまく実施しているのが産業用センサーを主力にして50%近い売上高営業利益率を誇るキーエンスである。営業部隊は多くの顧客企業の現場で問題点を探し出し、データベース化している。

顧客が抱える問題、それによって失っている金額や時間など、顧客の経済的価値に直結した情報である。その件数は、毎年、万単位に上る。これを活用して、選抜された優秀な商品企画担当者が、汎用ながら大きな価値に結びつく企画をつくる。大企業でも、ここまでうまく **C** の商品企画ができる仕組みを持った企業は少ない。

このように消費財・生産財共に、技術革新を^⑤真の顧客価値に結びつけるイノベーションの仕組みを構築することが、日本の成長戦略にとって喫緊の課題である。 (延岡健太郎「イノベーションの条件」による)

問一 傍線部①「潜」、④「意匠」の読みを、ひらがなで記せ。

問二 空欄 **イ** に入る語句としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から二つ選び、その記号を記せ。

- ア 一義的
- イ 意味的

- ウ 客観的
- エ 絶対的
- オ 歴史的

問三 傍線部②「現在は、液晶テレビや太陽電池パネルのように市場が拡大しても企業が利益を出せない事例が増えている」ことの理由として、もっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 使いやすさ、美しいデザイン、使い勝手を探究することができなくなったから。
- イ これまで以上に過当競争が起きやすく、利益を高めることが困難になったから。
- ウ 機能が過度に高度化・複雑化し、顧客が高価格では買ってくれなくなったから。
- エ 業務プロセスの分析が不足し、製品の経済価値を高められなくなっているから。
- オ テレビの3D化や何%軽量化のようなわかりやすい差別化が困難になったから。

問四 傍線部③「正しい人材」を説明した文として、ふさわしいものを、次のア～カの中から二つ選び、その記号を記せ。

- ア 顧客からのコストダウンの要望を実現するとともに、機能的価値と意味的価値の両方を探究できる。
- イ 消費財と生産財だけでなく、顧客起点と市場起点の両方の分野に精通し、独自の市場を開拓できる。
- ウ 優れたデザイン力を持ち、データベースを駆使して、製品の普遍的価値を分かりやすく説明できる。
- エ 独自性の高い意味的価値を徹底して追求しながら、顧客企業の業務や現場を探究することができる。
- オ 顧客が自ら気づくことが難しい深層に潜む価値を見だし、商品や解決策を提案することができる。
- カ 市場分析に優れた力を持ち、成長する分野だけではなく、普遍的に展開しやすい市場を開拓できる。

問五 空欄A～Cに入るもっともふさわしい言葉の組み合わせを、次のア～カの中から一つ選び、その記号を記せ。

- | | | | |
|---|---------|----------|--------|
| ア | A 技術革新 | B 生産財 | C 消費財 |
| イ | A 技術革新 | B デザイン価値 | C 顧客起点 |
| ウ | A 顧客起点 | B 顧客価値 | C 生産財 |
| エ | A 顧客起点 | B デザイン価値 | C 生産財 |
| オ | A 意味的価値 | B 生産財 | C 顧客起点 |
| カ | A 意味的価値 | B 顧客価値 | C 消費財 |

問六 傍線部⑤「真の顧客価値」を説明した文として、もっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 真の顧客価値は、イノベーションによって新しい機能や性能を追求することによって実現できる。
- イ 真の顧客価値は、新たな意味的価値の創造によって、顧客がデザイン価値を再定義することにある。
- ウ 真の顧客価値は、顧客に対して新たなデザイン価値を提供したり、問題解決の仕組みを構築することにある。
- エ 真の顧客価値は、市場価値や顧客価値の超越にあり、これによって新たな経済価値を生み出すことができる。
- オ 真の顧客価値は、消費財では過当競争が起るため難しいが、生産財は優れた人材の発掘によって創造できる。

問七 この文章が述べている内容と合致しないものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア イノベーションの本質は技術より価値創造にある。
- イ 顧客価値を構想できる人材の発掘・育成が重要である。
- ウ 規模が大きく成長する市場だけ狙うと失敗する可能性が高い。
- エ 機能優先には限界があり、広義のデザイン力を磨く必要がある。
- オ コンセンサス重視の意思決定ではなく、優れたリーダーが必要である。

二次の文章は、詩が苦手だという読者に向けて、詩とは何かということを説いたものである。この文章を読んだ、後の問いに答えよ。

詩は必ずしも詩集や詩の教科書の中にあるとは限りません。詩の外にこそ、詩はある。詩が苦手だという人は、たいてい自分が詩の外にいたいと思ひこんでいるのですが、ほんとうは中にいる。知らないうちにも、私たちは詩を実践しているのです。

ここで注目したいのは「聞く」という感覚です。私たちは日常の中の「シェウシ音や声を耳にしているけれど、いつも聞こえてくると感じているわけではありません。聞くことと、聞こえてくることとは違う。私たちはしばしば聞いてはいる。けれど、聞こえてくるわけではない。このあたりの違いを説明してみたいと思います。」

【ひとつ訊いてみたいのですが、みなさんは最近、何か退屈な思いをしたことがあるでしょうか。ないという人は幸せです。うらやましい限り。でも、たいていの人はある。では、どんなときにみなさんは退屈な思いをするでしょう。

私の経験で言うと、たいていそこには「形」がかかわっています。ふだん私たちは仕事をしたり、遊んだり、食べたり、眠ったりしているけれど、そういうことに取り組んでいる間は、なかなか退屈している余裕はない。済ませねばならない課題があったり、やりたいことがあったりして、その目標に熱中するからです。目の前に食事が出されたら、まずは箸をとり、冷めないうちに食べようと思う。

ところが、ときにそのような課題に本気で取り組めない、もしくは取り組む必要がない、という状況が生じます。たとえばあまりに仕事の内容が単純だ、簡単だ、とか。ゲームをやっている、相手が弱すぎてやる気が出ない、とか。こうしたとき、私たちはそれを形の上だけでやることになる。のめり込まずに、でも、やり方だけは守って行く。】

これが退屈の第一歩だと私は思います。何かを形だけ行う。より典型的なのは儀式です。結婚式やお葬式など、最初から最後までやらねばならないことの手順は決まっています、およそ予想外のことはほとんどない。このプロセスに退屈を感じる人は多いでしょう。もちろん儀式で主役となる人々は、感情がこみあげてくる中きちんとやり方を守るのに必死で、退屈どころではないかもしれません。でも、参加者の多くは手順が踏まれるのを、気分的に少し離れたところから見守っているわけです。

このような儀式には、つきものの要素があります。声です。教会の結婚式であれば神父さんのお説教とか祈りとか。披露宴でも司会の案内のほかに、必ずスピーチのようなものがある。お葬式でもそうです。お経や祈り、弔辞、弔電の読み上げ、挨拶……。

あたり前だ、と言う人もいるかもしれませんが、でも、ちよつとでいいので、この「あたり前だ」という常識をいったん停止してください。このように儀式の最中に誰かが声を発するのはなぜか考えてみて欲しいのです。儀式以外の場面ではどうか。声はふだんは、ものすごく偶然に支配されています。不安定であてにならない。はかない。声とは、まさにそれが私たちが生きていくうえでとても大事な道具であるがゆえに、いろいろな状況に応じて使いこなさなければならないものです。だからこそ、私たちは声の「迫真性」を信頼する。「危ない」とか「助けて」という声を聞けば、誰もが思わず振り向くでしょう。声はいま、ここ、と密着している。

しかし、儀式ではちがう。儀式の声は約束事の上に作られた声です。半ば偽物である。あくまで形だけだからです。日常世界で私たちが体験している声とは異なった次元に属すると言える。ではそんな声は、儀式の中でどのような役割を果たしているでしょう。聞いている人の多くが退屈する、決まり切った型をあてがわれた声がなくはないものであるかのように使われるのはなぜなのか。

それはきっと、あてにならないような不安定なものに形を与えるところにこそ、儀式の最大の役割があるからではないかと私は思います。そもそも儀式などというものがあるのは、だからと際限なくつづく時間に、意味

のある切れ目をつくるためです。結婚や死や、入学や入社や、結婚五〇周年や六〇歳の誕生日といったものに意味を与え、時間を区切る。そのためには、きわめて不安定な現象としての声に、まるで実在であるかのように形を与えるのがもつとも効果的なのです。形を与えられた声は、声が本来持っている流動性や突然性や新しさやひいてはリアリティを失って、モノと化す。これはどドラマティックなことではありません。瞠目するほどの展開だと言えるでしょう。モノと化した言葉は退屈です。私たちの生活にかかわりを持つのはモノと化す以前の声なのです。対して、モノと化した言葉は死んでいます。化石です。でも化石だからこそ、不動の印となる。

さて。ここで私はいよいよ大事なことを言おうと思います。みなさんからは反論が出るかもしれませんが、私はまったくまじめです。実は詩は、このような退屈で死んだ言葉に非常に近いところにあるのです。近接していると言つてもいいし、際にあると言つてもいい。

というのも、詩のもつとも大事な機能の一つに、儀式になろうとする衝動があるからです。詩とは生きているぐにやぐにやしたリアルなものに、形を与えようとする衝動だからです。もちろん殺そうというのではない。生け捕りにしたい。でも、形を与える以上、もはやそれは通常の時間の中にあるものとは少し違ったものとならざるをえない。どこかあらたまったものである。儀式のときに私たちが喪服やタキシードを着たりするのと同じで、詩にはフォーマルウェアを身にまとうような緊張感が漂う。いや、逆の言い方をすると、フォーマルウェアに身をつつんで儀式に向かうときの、退屈ではあるけれどささやかな緊張の漂うあの気分こそが、詩につながる感覚なのです。

冒頭的话题に戻りましょう。聞こえてくる、という感覚が詩では大事になると私は言いました。それはなぜかというと、言葉の意味のあるものとして、つまり自分の必要や欲求に直結した意味のあるものとして耳にするのとは違う聞き方のモードがあるからです。生の現実中の言葉の、その新鮮さやきらびやかさや唐突さに衝撃を受けつつも、同時に、そのような文脈や状況から言葉の威力を丸ごと引っこ抜いてしまいたい。そのようなとき、私たちは言葉を聞くのではない。言葉が聞こえてくるのです。まるで外からやってくるかのように、半ば嘘であるかのように、形だけのものであるかのように聞こえてくる。言葉がそれを使う人から、またそれを耳にする人からも、少しだけ独立してしまうのです。

儀式の中で行われるスピーチやお経や祈りの多くは、単なる形式にしか聞こえないかもしれません。もともとそれが引っこ抜かれてきた生の現実からすつかり遊離しているから。そうなってしまうと完全に化石です。死んだ言葉です。しかし、中にはぐにやぐにやした現実をたつた今、形へと変換したばかりのように聞こえる言葉がある。言葉が聞こえてくる、という感覚をそのまま伝えるようなものがある。そのような言葉は、まだ形の際のところにあるのです。生の現実には形を与えたいという際どい衝動そのものを、まだダイゲンしている。

いい詩とはそのようなのだと私は思います。詩は本質的な退屈さを抱え持ったものです。これまでの部分を読んでいただければその意味はおわかりかと思えます。詩はあらたまっていて、フォーマルな気分には満ちていて、

F

時間よりも、

G

時間に軸足を移しているから。そういう意味では詩

は儀式に近い。でも、完全に儀式になつてしまつたら、詩でいることはできない。儀式寸前、くらいなのです。儀式にしよう、儀式になろう、という衝動の中に詩がある。

よく詩が苦手という人の意見として、詩は小説とちがつてストーリーがないから読みにくいというものがあります。その通り。詩が、次はどうなるのだらう？と思わせることはそれほどありません。はらはらするようなサスペンスによって、語りが生の時間のうちにあるように装ったりはしないのです。詩が重きを置くのは、むしろ逆のこと。生の時間から抜け出すこと、超越することです。揺るがぬ時間を生み出したいのです。ただ、繰り返しになりますが、ほんとうの揺るがなさは、激しく動くものに形を与えたときにこそ生まれます。はじめから固まっているものを寄せ集めても脆弱な安定しか得られません。動きを内にはらんだ揺るがなさこそが強いのです。そういうわけなので、詩人は音や声が聞こえてくる、という感覚にとっても敏感です。また、そのような状況を描

き出すことを通して、詩の言葉そのものをまるで聞こえてきたもののように、つまり生の時間から一步抜け出した儀式の言葉に近いものとして表現するのも得意です。

しかし、敏感なのは詩人だけではありません。私たちもまた敏感なのです。そのことを覚えておいて欲しい。日常生活の中で「あ、声が聞こえてくる」と思ったとき、私たちは詩のすぐそばまで来ているのです。

(阿部公彦『詩的思考のめざめ』による)

問八 傍線部①「シュウシ」、②「タイゲン」のカタカナにあてはまる漢字を楷書で記せ。

問九 傍線部A「聞こえてくるという感覚」とは、本文の内容を踏まえると、どのような声に対する感覚を指しているのだろうか。次のア～オの中から、もつともふさわしいものを一つ選び、その記号を記せ。

- ア 雑踏の中で友人が自分の名前を呼ぶ声
- イ 卒業式における来賓のはなむけの言葉
- ウ 電車の中で隣の席に座った恋人の会話
- エ お腹を空かした赤ちゃんが泣き叫ぶ声
- オ テレビドラマにおける登場人物の対話

問十 「一」でくくった部分が、本文中で果たしている役割について説明した文として、正しくないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 詩が苦手な人の多くが詩を退屈なものと感じているという事実を前提として、人が退屈に感じるのはどのような状況なのかを具体的な例を挙げて説明した段落。
- イ 私たちが退屈だと感じる時、しばしば形式的に物事を進めているという事実を指摘し、形式の権化ともいべき儀式についての話題へと誘導するための段落。
- ウ 儀式と類似点の多くある詩歌の退屈さを説明するため、まず人が退屈だと感じる時、そこに形が関わっている事実を具体的な例を通じて確認するための段落。
- エ 詩が私たちと身近であることを証明するために、人が退屈と感じる時の状況を具体的に例示して、それらと詩が本質的に異なることを際立たせるための段落。

問十一 傍線部B「迫真性」と同じ意味で用いられている言葉を、本文中から五字以内でそのまま抜き出して記せ。

問十二 傍線部C「あてにならないような不安定なものに形を与える」を説明した文として、もつともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 儀式の対象となる様々な機会は、国や地域が異なれば、形式も自在に変化して一定の形など存在しないが、その目的は同一で、いずれも不可視な現実を可視的な形に変えるという点にあるということ。
- イ 儀式の本質は形式であり、参加者が身をもつてその形式を体験することによって、現実と連続する瞬間として、その対象となる機会を明確に意識し、それぞれの記憶のなかに定着させるものであるということ。

ウ 儀式は、当事者にとっても、連続する時間の通過点に過ぎず、そもそも形ある完結した瞬間ではないが、当事者にそれが意味のある時間の切れ目と認識させることを目的として行う形式にほかならないということ。

エ ぐにやぐにやして不安定きわまりない現実に、一つの線を引き特定の意味を付加するためには、現実生活のなかで発せられるのとは異質な儀式における声が不可欠であり、それなくしては実現不可能であるということ。

問十三 傍線部 D 「これほどドラマティックなことはありません」とあるが、それはどのようなことか。その説明として、もつともふさわしいものを、次の A～E の中から一つ選び、その記号を記せ。

A 偶然性に支配され危険性をはらんだ声が、儀式の声として形を得て安定感を得ていくことは、思いもよらぬ効果を声にあたえ、声の持つ生き生きとした魅力を大きく広げていくということ。

イ 日常現実の状況に応じて使いこなされていく声が、儀式の中で約束事の上に作られた形だけのものとなって役割を果たしていくことは、本来の声の機能に逆らうような驚くべき転換であるということ。

ウ 儀式は人間の節目節目に意味ある切れ目を作るために行われるものだが、そこにおいて一見退屈そうに聞こえる儀式の音が、意外にも儀式を劇的に盛りあげて成功させてしまうことがあるということ。

エ 流動性や突然性を持っている音が、約束事に縛られたり、儀式の目的のために制約を受けたりしていくことは、声からその生命力を失わせることであり、声を死物化してその本質をゆがめていくということ。

問十四 傍線部 E 「詩は本質的な退屈さを抱えたものです」とあるが、それはどのようなことか。その説明として、もつともふさわしいものを、次の A～E の中から一つ選び、その記号を記せ。

A 詩は、生の時間から抜けだして、現実の形を与え、儀式になろうとする衝動であるということ。

イ 詩は、だらだらと際限なくつづく時間に形を与え、揺るがぬ時間を生み出すものであるということ。

ウ 詩は、生の現実から遊離し、決まり切った型をあてがわれた、なくてはならない声であるということ。

エ 詩は、私達の生活にかかわりを持ち、偶然に支配されることをやめてモノと化す以前の声を形に変換したものだということ。

問十五 空欄 F・G に入るもつとも適切な言葉の組み合わせを、次の A～E の中から一つ選び、その記号を記せ。

A F 生きた流れる G 枠を与えられた

イ F はかなく短い G 輪郭が明確な

ウ F 華やかで整った G 秩序立っていない

エ F 揺るがぬ不変の G 常に変化し続ける

〔以下余白〕

問七

問六

問五

問四

問三

問二

問一

⑤

③

②

イ

①

④

<H27092081>

受験番号	万	千	百	十	一
カ氏名					
氏名					

(所定欄以外に番号・氏名を書いてはならない)

2015年度

国語

(解答用紙)

No. 1 / 2

採点欄

(この線で二つ折りにして書きなさい)

問十五

問十四

問十三

問十二

問十一

問十

問九

問八

E

D

C

B

A

①

②

2015年度

国語

(解答用紙)

No. 2 / 2

採点欄